

『新青年』における専門用語（Ⅰ）

—翻訳された論文・作品について—

鳥 井 克 之

所謂『五四時期』を表象する雑誌『新青年』は1915年に創刊され、1926年に停刊された。その間10年のあいだには、何度かの変動があったが、五四時期における反封建闘争、新文化・思想の導入と確立において輝かしい役割を果たした。李龍牧氏は『新青年』の10年間にわたる歴史を大きく三時期に分けている^①。即ち、『青年雑誌』（1916年2巻1号より『新青年』と改称）の創刊の辞にあたる「敬告青年」に見られるように、「自主的であって奴隸的でない」「進歩的であって保守的でない」「進取的であって退嬰的でない」「世界的であって鎖国的でない」「実利的であって虚飾的でない」「科学的であって空想的でない」という青年に対する六項目の要望を提示し、その趣旨によって編集方針を立て、具体的には封建制の精神的、時には物質的な支柱となっていた儒教批判の一大キャンペーン、それに附随する迷信に反対する闘争と自然科学の紹介、他方では文言文に反対して白話文を提唱した所謂「文学革命」の根拠地ともなり、1918年12月に第5巻第6号が出版されるまでのこの第一期は「徳莫克拉西（Democracy）」と「賽因斯（Science）」と「文学革命」の語によって総括される反封建的新文化運動期と規定している。これに続く第二期は1919年1月（6巻1号）より1921年7月（9巻3号）までである。つまり6巻1号で「本誌罪案之答弁書」でもって外部の特に段祺瑞の御用グループ安福俱樂部機関紙『公言報』の『新青年』の編集方針に対する反動的な攻勢に対抗し、第一期の啓蒙運動の総括をした時より中国共産党が正式に結成された時までを一時期として区切り、1919年5月（6巻5号）の「マルクス主義特集号」、1920年5月（7巻6号）の「メーデー記念号」といった特集号の編集・出版に象徴されるようにこの期をプロレタリアートのためのマルクス主義宣伝誌の時期としている。この第二期に入って誌面はほとんど文言文にとってかわって白話文が主流を占める。最後の第三期は中国共産党が成立した後、継続して1921年9月に9巻5号が出版されるが、その後9ヶ月休刊され、1922年7月に9巻6号が出版されて、一応9巻は終了する（毎巻は6号分で1巻となっている）。さらに1923年6月に『新青年』は季刊（実際には革命運動の高揚、人手不足などのため1923年6月第1期、同12月第2期、24年8月

第3期, 同12月第4期をそれぞれを出版し, 実質的に半年刊となる) となり, 季刊第1期では「新青年的新宣言」において『新青年』は「中国プロレタリア革命の羅針盤とならなければならない」と宣言し, プロレタリア階級解放の理論雑誌となることを表明し, さらに1923年6月の中国共産党第四期第三次中央拡大執行委員会において『新青年』を中国共産党中央理論機関誌とする決議がなされた。かくして名実共に『新青年』は中国共産党理論雑誌となったのである。かくして文芸欄は季刊第2期の革命詩8首・チューホフ一幕劇(熊)・文学評論1篇を最後としてその後の『新青年』から姿を消し, 国際的共産主義運動の紹介・論文(翻訳を含む)が誌面の大部分を占め, 1925年に入って元の月刊誌にする準備をするが, 定期出版は不可能となり, その後は不定期刊行となり, 1925年4月第1号(レーニン特集号), 同6月第2号, 26年3月第3号, 同5月第4号, 同7月第5号(世界革命号)をそれぞれ出版して, 『新青年』はその後われわれの眼にすることができなくなったのである。

以上簡単に『新青年』の歴史を紹介したが, より全面的かつ詳細な紹介は李・藤田両氏の論文にゆずるとして, 本論文では上記の『新青年』の三乃至四つの時期区分を理解した上で, 『新青年』に見られる日中両国の文化交流を反映したと考えられる語彙——特に新しい西洋文化・思想を表象する語彙について比較検討することにしたい。そこでまず第一に新しい西洋文化・思想を『新青年』ではどのように紹介・導入したかを詳細に検討する必要がある。そのため煩を厭わず『新青年』に翻訳された外国(西洋以外に日本も含まれる)著作(文芸作品と人文・社会・自然科学分野の論文・評論など)を調査し, さらに『新青年』と同時期の諸雑誌におけるそれとを比較して, 中国における新しい語彙が設定される背景または土壌を考察することにする。この上にさらに同時期における日本の西洋文化・思想に関する翻訳の傾向を調べ, それを中国のそれと比較し, 日中両国における外国著作の翻訳傾向の異同について理解し, 具体的な語彙調査に先だつ社会学的側面を考察した。他方, 言語学的側面についてはいくつかの具体的調査資料に基づいて日中両国語彙の異同についてその主なるケースを設定して, 今後の大量の語彙調査・整理のための一応の枠組の指定する段階までを基礎的研究・調査作業とし, ひとまず第1回研究報告を行なうものである。

『新青年』に翻訳された著作

『新青年』が積極的に西洋文化・思想の紹介に大いに力を入れたことは, 新文化運動啓蒙雑誌としては当然のことであるが, それはまず西洋文化・思想著作の翻訳, あるいは外国事情の紹介となってまず具現された。さらにそれを象徴するかのよう創刊第1巻(『青年雑誌』と

称されている)の6冊のうち最後の第6号^④以外はすべてその表紙の中央部分にかかげられた肖像画は外国人である。即ち第1号はカーネギー、第2号はツルゲーネフ、第3号はオスカー・ワイルド、第4号はトルストイ、第5号はフランクリンの肖像が飾られていることに如実に西洋志向の編集方針がうかがえる。各号には肖像画の人物の伝記が紹介されている。また誌面に「世界説苑」が創刊号より第2巻4号(但し2巻1号には休載)まで李亦民の編訳によって連載されている。第1巻第1号・2号ではドイツ国情・ベルリン案内が、3号ではベルギー国情が、3号より6号まではフランス国情とパリ案内が、第1巻6号と第2巻2・3号ではイギリス国情が、4号では欧米人種改良問題が取上げられている。また創刊号より第3巻6号まで『新青年』記者によって「国内大事記」とならんで「国外大事記」が掲載され、読者に国際時事問題について解説している。第4巻以後は特集欄こそ設けてはいないが、時事評論として中国人の筆になる論文がこれに変わり、また外国人の著作の翻訳は終刊まで続いてはいるが、これに平行して中国人自身の西洋文化・思想に対する評論・論文の比重が次第に大きくなっていくことが指摘できよう。また第一巻では直接外国語文献を読む機会を設けるために〔英漢対訳〕を連載している^⑤。さらに書評欄の〔書報紹介〕において中国語訳のない外国語原書についての紹介・評論をなして^⑥、中国人青年が積極的に外国書に取組むことを奨励している。要するにこの様に『新青年』は、特に初期において外国文化・思想の紹介に大いに力を注いでいることが容易にうかがい知ることができるのである。

そこで本節では前節の終りに明示した如く『新青年』に掲載された翻訳文献を中心にその傾向を考察することにする。暦年に従い、同時にまたジャンル別に詳細に検討する。ジャンルとしては①政治・思想、②歴史、③文学、④小説、⑤戯曲、⑥詩、⑦その他の7部門に分ける。

I. 政治・思想(マルクス主義・社会主義・社会問題を包括する)

第1巻では西洋文明を支える近代精神について翻訳したものが主だったものである。

1-1 「近世思想中之科学精神」(英国, Huxley) 劉叔雅訳(第1巻第3号, 以下「I-3」と省略する)

1-2 「英国人之自由精神」(米国, Burk) 劉叔雅訳(I-6)

1-3 「英国言論自由之権利論」(英国, Dicey) 高一涵訳(I-6)

この他に婦人・青年論をあつかったものが見られる。また英国の少年団活動を紹介したものがその中に包まれる。

1-4 「婦女論」(Max O'Rell) 陳独秀訳(I-1)

1-5 「青年論」(米国, Markwick, Smith) 一青年訳(I-1・3)

1-6 「英国少年団規律」李穆訳（I-6）

1-7 「巡視英国少年団記」（英国, Boyær）澎生訳（I-6）

第2巻では小説・戯曲の翻訳は多いが、この分野での翻訳は皆無である。

第3巻も第2巻と同様傾向が見られるが、婦人論を毎号論じているので、その一環として次の1篇が見られるだけである。

1-8 「結婚与恋愛」（米国 Miss Goldman）震瀛訳（III-5）

第4巻も第3巻と同様に婦人論についての1篇があるだけであり、第1号での「女子問題」陶履恭、第6号「イブセン特集号」での「人形の家」の全幕訳と関連する内容のものである。

1-9 「貞操論」（日本, 与謝野晶子）周作人訳（IV-5）

第5巻には画期的な論文「Bolshevism 的勝利」が李大釗によって発表されたのであるが、この巻のこのジャンルの翻訳では第一次世界大戦の終結に関する時事評論と青年・婦人論に関するものが各1篇あるだけである。

1-10 「協約国与普魯士政治理想之对抗」（米国, Wellby）陳達材訳（V-5）

1-11 「結婚論」（フィンランド, Westermark）楊昌濟訳（V-3）

第6巻では「マルクス主義研究専号」（第5号）が出版されているが、マルクス主義原典の翻訳はなく、日本の大正時代の思想界の反映として吉野作造の論文や日本人のトルストイ論が紹介されている。

1-12 「選挙権理論上の根拠」（日本, 吉野作造）高一涵訳（VI-4）

1-13 「靈異論」（ドイツ, Haeckel）劉叔雅訳（VI-2）

1-13 「啓発托爾斯泰的兩個農夫」（日本, 昇曙夢）鄒詔訳（VI-6）

1-14 「俄国革命之哲學的基礎」（英国, A. S. Rapport）起明訳（VI-4・5）

第7巻では「人口問題特集号」（第4号）と「メーデー記念号」（第6号）が出されているが、これに関する翻訳は1篇だけであり、他はこの年に訪中したデューイの講演録と他に1篇あるだけである。

1-15 「職工同盟論」（ロシア, S. A. P）C・S生訳（VII-6）

1-16 「杜威講演録」（米国, Dewey）高一涵・孫伏園訳（VII-1・2・3・4・VIII-1）

1-17 「精神独立宣言」（フランス, Romain Rolland 他）張松年訳（VII-1）

第8巻になってはじめてレーニンの著作が翻訳され、同時に第1号より第6号までの全号と第9巻第3号の7冊に「俄羅斯研究」の欄が設けられ、30篇を超える論文が翻訳紹介された。また英国の Bertrand Russel が訪中したことを記念して彼の著作の翻訳紹介と評論がなされ

ている。翻訳資料の原典の大部分を当時ニューヨークで出版されていた「Soviet Russia Weekly」に求めている。またペーベルの婦人論の一部が翻訳されている。

- 1-18 「民族自決」(ソ連, Lenin) 震瀛訳 (VII-3)
- 1-19 「女子将来的地位」(ドイツ, Bebel) 漢俊訳 (VII-1)
- 1-20 「到工団主義的路」(英国, Harley) 李季訳 (VII-5)
- 1-21 「廃止工銭制度」(英国, Cole) 高一涵訳 (VII-6)
- 1-22 「反動力怎樣帮忙」(米国, Dewey) 震瀛訳 (VII-4)
- 1-23 「在莫斯科万国大会演説」(ソ連, Gorky) 李少穆訳 (VII-2)

「俄羅斯研究」は上に述べたように7回連載されたが、全部で35篇の論文があるが、うち3篇は紹介論文であり、他の32篇は翻訳でその半数近くの14篇は『Soviet Russia』からの翻訳であり、訳者はすべて震瀛一人でなされている。論文題名と巻号を次に記そう。

- 1-24~37 「全俄職工連合大会」VII-3, 「労農協社」VII-3, 「俄羅斯的我觀」VII-3, 「列寧最可惡的和最可愛的」VII-3, 「俄羅斯的教育狀況」VII-4, 「蘇維埃俄羅斯的労働組織」VII-4, 「蘇維埃政府的經濟政策」VII-4, 「文芸与布爾塞維克」VII-4, 「赤軍教育」VII-4, 「中立派大会」VII-4, 「過渡時代的經濟 (Lenin)」VII-4, 「俄国与女子①蘇維埃俄羅斯的労働女子②家庭与雇傭的女工③蘇維埃俄羅斯的女工④俄国‘布爾塞維克主義’和労働的女子⑤俄国赤軍中的女子⑥俄国女工的狀況」VII-5, 「俄国底社会教育」VII-5, 「列寧与俄国進歩」VII-6

この他に震瀛は「俄羅斯研究」に次の8篇を翻訳紹介している。実に32篇中22篇を彼一人が翻訳しているのである。

- 1-38~45 「克魯巴特金説‘停戰罷’」(英国『自由』月刊) VII-3, 「蘇維埃的教育」(パリ『人道報』) VII-4, 「彼得格拉的写真」(パリ『共產報』) VII-4, 「革命的俄羅斯底学校和学生 (Dublin's Watchword) VII-4, 「俄羅斯の実業問題」(米国国民雑誌) VII-4, 「蘇維埃俄羅斯的社会改造」(米国国民雑誌) VII-4, 「労農政府召集經過情形」(モスコウ『真理報』) VII-4, 「俄羅斯 (Georg Brandes)」VII-6

他の10篇は次の通りであるが、その中に日本の山川均, 山川菊栄, 佐野学のものが含まれている。

- 1-46 「俄羅斯蘇維埃政府」(米国, Ross & Perlman) 張慰慈訳 (VII-1)
- 1-47 「俄羅斯同業組合運動」(ロンドン, ロシア人民通信社) 漢俊訳 (VII-1)
- 1-48 「我在新俄羅斯的生活」(米国, Humphries) 漢俊訳 (VII-1)

- 1—49 「蘇維埃共和国産婦和嬰兒及科学家」(米国, Lincoln Eyre) 漢俊訳 (VIII—2)
 1—50 「關於蘇維埃俄羅斯的一個報告」(中ソ通信社来稿) VIII—2
 1—51 「蘇維埃的平民教育」(モスコウ『ソヴイェト年報』) 楊明齋訳 (VIII—2)
 1—52 「俄国職工連合会發達史」(Tomski) 楊明齋訳 (VIII—3)
 1—53 「勞農俄国底勞働連合」(山川均) 陳望道訳 (VIII—5)
 1—54 「俄国農民階級闘争史」(佐野学) 李達訳 (VIII—6)
 1—55 「勞農俄国底結婚制度」(山川菊栄) 李達訳 (VIII—6)
 1—56 「勞農俄国底婦女解放」(山川菊栄) 李達訳 (IX—3)

「俄羅斯研究」の欄には入っていないが、それに類似する翻訳としては次の1篇がある。

- 1—57 「我們要從那里做起」(Trotsky) 震瀛訳 (VIII—3)

Russel の論文や Russel に関する評論翻訳には次の13篇があるが、そのうちの評論3篇は『Soviet Russia』からのものであり、やはりここでも震瀛が2篇翻訳している。まず先に論文翻訳をあげると、張崧年が次の3篇

- 1—58~61 「夢与事实」(VIII—2), 「民主与革命」(VIII—2・3), 「哲学里的科学法」(VIII—2)
 翻訳し、同時に Russel の評伝、著書目録を編み、中国への Russel 紹介に尽力している。この他に4氏が各1篇翻訳している。

- 1—62~65 「工作与報酬」凌霜訳 (VIII—2), 「游俄感想」雁冰訳 (VIII—2), 「能够造成的世界」
 李季訳 (VIII—3), 「自叙」鄭振鐸訳 (VIII—3)

評論については次の5篇がある。

- 1—66 「羅素論蘇埃維俄羅斯」(米国, Hartman) 雁冰訳 (VIII—3)
 1—67 「批評羅素論蘇埃維俄羅斯」(New York『Soviet Russia』) 震瀛訳 (VIII—4)
 1—68 「羅素——一個失望的旅客」(New York『Soviet Russia』) 袁振英訳 (VIII—4)
 1—69 「羅素与哥爾基」(New York『Soviet Russia』) 震瀛訳 (VIII—5)
 1—70 「一封公開的信給自由人月刊記者」(Miss Black) 雁冰訳 (VIII—6)

第9巻ではレーニンの著作をはじめ社会主義文献の翻訳が7篇^⑦をはじめ、1921年7月11日に米国が日本・英国・フランス・イタリアに対して軍事制限と太平洋・極東問題討議のため、ワシントン会議を開催することを非公式に提議し、8月13日に日本にも正式に招請がなされ、それに対して日本が8月23日に参加を表明し、11月12日より明1922年2月6日まで「ワシントン会議」が開催されるが、これに先立ってこの会議に関する評論が3篇翻訳されている。

- 1—71 「無産階級政治」(ソ連, Lenin) 成舍我訳 (IX—2)

- 1—72 「列寧の婦人解放論」(ソ連, Lenin) 李達訳 (IX—2)
- 1—73 「從科学的社会主义到行動的社会主义」(日本・山川均) 李達訳 (IX—1)
- 1—74 「社会主义国家与労働組合」(日本, 山川均) 周仏海訳 (IX—2)
- 1—75 「馬克思学説之兩節」(ドイツ, 貝爾) 緒選訳 (IX—6)
- 1—76 「俄国新經濟政策」(ソ連, Bukharin) 雁冰訳 (IX—6)
- 1—77 「對於華盛頓太平洋會議」(第三インター執行委員会) 張椿年訳 (IX—5)
- 1—78 「對於太平洋會議的我見」(日本, 山川均) 訳者名なし (IX—5)
- 1—79 「太平洋會議」(日本, 堺利彦) 訳者名なし (IX—5)
- 1—80 「結群性与奴隸性」(英国, F. Galton) 周建人訳 (IX—5)

この他に雑誌『覚悟』より転載された河上肇のマルクス主義文献の翻訳が2件ある。

- 1—81 「俄羅斯革命和唯物史観」C・T生訳 (IX—6)
 - 1—82 「馬克思主義上の所謂『過渡期』」光亮訳 (IX—6)
- 季刊（実際は半年刊）4号分について見るに、翻訳されたものはコミンテルン関係の文献とレーニン・スターリンの著作が大半を占めている。コミンテルン文献では
- 1—83 「東方問題之題要（共産国際第4次大会之議決案）」一鴻訳（季刊第1期，以下「季—1」と略す）
 - 1—84 「共産主義之於勞工運動」(ソ連, Lozovsky) 訳者名なし（季—1）
 - 1—85 「殖民地及半殖民地職工運動問題之題要（赤色職工国際第二次大会之議決案）」陳独秀訳（季—1）
 - 1—86 「世界革命中之農民問題」(ソ連, Varga) 亦農編訳（季—1）
 - 1—87 「共産主義之文化運動（①項萊之演説②克魯朴斯嘉女士之演説）」湊湊女士訳（季—1）
 - 1—88 「現在的力量」(ソ連, Lozovsky) 超世炎訳（季—3）
 - 1—89 「東方革命之意義与東方大学職任」(Trotsky 演説) 鄭超麟訳（季—4）
 - 1—90 「第三国際第二次大会關於民族与殖民地問題的議案」光赤訳（季—4）
- レーニンの著作には次の5篇があるが、その中の3篇を仲武が翻訳している。
- 1—91 「民族与殖民地問題」蔣光赤訳（季—4）
 - 1—92 「中国戦争」弼時訳（季—4）
 - 1—93 「革命後の中国」仲武訳（季—4）
 - 1—94 「亜洲的醒語」仲武訳（季—4）
 - 1—95 「落後的欧洲与先進的亜洲」仲武訳（季—4）

スターリンの著作は次の1篇がある。

1-96 「列寧主義之民族問題的原理」 蔣光赤訳（季-4）

レーニン・スターリンの著作はいずれも民族・殖民地問題に関するものであって、コミンテルと直接に関連するものである。他はマルクス・レーニン主義・社会主義社会に関するものである。

1-97 「列寧論」（ドイツ, Radek）張秋人訳（季-2）

1-98 「弁証法与邏輯」（ソ連, Plekhanov）鄭超麟訳（季-3）

1-99 「馬克思主義弁証法底幾個規律」（ソ連, 阿多那斯基）石失抄訳（季-3）

1-100 「馬克思与俄羅斯共產党」（ソ連, Riazanov）羅忠訳（季-3）

1-101 「俄国新經濟政策」（日本, 山川均）王国漢訳（季-2）

1-102 「社会主義的社会之基本条件和新經濟政策」（ソ連, Bukharin）尹寬訳（季-3）

他に次の条約・宣言の翻訳がある。

1-103 「社会主義蘇維埃共和国連邦条約及宣言」 訳者名なし（季-3）

1-104 「俄羅斯無政府党宣言」 張国燾訳（季-2）

1925年4月より1926年7月までに5冊出版された所謂「不定期刊」の『新青年』に翻訳掲載されたものはすべて政治・思想に関するものであり、他の文学・文芸作品の翻訳は完全になくなってしまった。内容的には「季刊」期とほとんど変りはない。第1期に「レーニン号」、第5期に「世界革命号」の特集号がある。鄭超麟はこの期に論文を3篇発表すると共に、6篇を翻訳している。まずレーニン・スターリンの著作を挙げる。

1-105 「專政問題的歷史觀」（レーニン）鄭超麟訳（不定期刊第1期，以下（不-1」と略す）

1-106 「第三國際及其在歷史上的位置」（レーニン）鄭超麟訳（不-1）

1-107 「社会主義國際的地位和責任」（レーニン）陳喬年訳（不-1）

1-108 「托洛茨基主義或列寧主義？」（スターリン）鄭超麟（不-2）

1-109 「蘇連政治經濟概況」（スターリン）蔣光赤訳（不-5）

先にあげた（1-97）レーニン論に続いて次の2篇がある。

1-110 「列寧」（ドイツ, Radek）華林訳（不-1）

1-111 「馬克思主義者的列寧」（ソ連, Bukharin）鄭超麟訳（不-3・4）

他にはマルクス主義・國際革命運動に関する文献がある。

1-112 「馬克思主義的歷史研究觀」（ソ連, Pokrovsky）王尹雅訳（不-4）

1-113 「西欧農民運動的前途」（ソ連, Martynov）鄭超麟訳（不-1）

1—114 「国際共産主義運動之目的問題」(ソ連, Zinoviev) 鄭超麟訳(不—5)

1—115 「世界職工運動之現状与共産党之職任」(Lozovsky) 瞿秋白訳(不—5)

1—116 「英国大罷工の原因及其経過」(日本, 劍持平太) 耳悚訳(不—5)

以上『新青年』に見られる政治・思想論文の翻訳について列挙したが、次のようなことが指摘しうる。

1. 今後詳細に語彙調査を試みなければならない論文として116篇を指定したが、その翻訳論文の内容を検討するに、翻訳する論文内容の傾向は第8巻を境として断層が存在することが指摘できる。つまり、『新青年』における翻訳史は第8巻を境界にして大きく前期と後期とに区分される。

2. 前期は『新青年』が創刊した当時のスローガン「科学」と「民主」に象徴されるように、科学論(1—1)、民主・独立・自由論(1—2・3・10・12・17)の翻訳紹介に力が入られ、それを実際行動にうつすために若い年代層へのアピールを意図して、女性論(1—4・9・19)、青年論(1—5・6・7)が並行して掲載され、さらに若き世代の男女を啓蒙するための恋愛・結婚論(1—8・11)を翻訳し、西洋の青年層の進歩的な態度を撰取することを推めている。しかし初期の青年・婦人論^⑩はゾラの「人形の家」に代表されるブルジョア民主主義社会における婦人の封建制度よりの解放、自我の確立が主題であったが、(1—19)の論文になると社会主義を指向する婦人論と変化している。その間にトルストイ論^⑪(1—13)、デューイの論文^⑫(1—16<但し4回連載>・22) 霊異論(1—13)が翻訳紹介されている。前期の翻訳論文は(1—14・15)を除いてはマルクス主義以外の西洋近代文明・思潮を紹介するものに重点を置いていたことが如実に反映される。また翻訳件数も後出のラッセル関係の13件をわずかに上まわる15件にすぎない。前期は第1巻第1号より第7巻第6号までの42冊が1915年9月より1920年5月までの5年間に出版したことを考えあわせると、次にあげる文学作品の同期における翻訳件数や後期における政治・思想論文の翻訳件数に比較してかなり少ないことが看取しうる。即ち積極的にこのジャンルの翻訳紹介に取組まなかったことを物語っている。この点についてはマルクス主義関係論文の翻訳はまったくこの期にはなされていなかったが、中国人、たとえば李大釗によるマルクス主義・社会主義・労働問題についての論文・評論^⑬が掲載されていたことを考える時、中国人のマルクス主義受容における姿勢をうかがえるものとして、興味深い問題が存在していると言えよう。

3. 後期の翻訳論文の傾向は、前期の西洋近代主義の導入を主目的にしたのに対して、マルクス主義・社会主義の紹介に力点を置いてまことに内容的にも対照的であり、その翻訳件数に

においても100件を数え、前期のその5倍以上であり、量的にも飛躍していることがまず指摘できる。後期的内容の翻訳はすでに第6巻第4・5号(1—14)および第7巻第6号(1—15)にそれぞれ見られたが、第8巻第1号に「俄羅斯研究」の特別欄が設けられたことが、まず先づれとなり、同第3号にレーニンの「民族自決」が翻訳されると、後期の翻訳傾向はさらに顕著に決定づけられたと言える。レーニンの論文13点、スターリンの論文3点が翻訳されているが、マルクス・エンゲルスの論文は翻訳されていない。評論や論文の一部分に抄訳・紹介されるにとどまっていることは特記すべきことである。特に1906年に朱執信の「共産党宣言」の中国語訳(抄訳)が『民報』第2期に掲載されたのを皮切りに『新青年』停刊の1926年までに限定しても12件16点^⑭(「共産党宣言」^⑮3点、「社会主義從空想到科学的發展」2点、「雇傭労働与資本」2点、「哥達綱領批評」2点が重複している)が中国語に翻訳されているにもかかわらず、『新青年』にはマルクス・エンゲルスの著作は一点も翻訳されていないのである。これに対してレーニン・スターリンの著作の中国語訳に関しては、『新青年』が先駆的役割を果たし、(1—18)や(1—24~37の11番目の「過渡時代的經濟」=「無産階級專政時代的的政治与經濟」)はレーニン著作の中国語訳の嚆矢であり、(1—96)や(1—108)はスターリン著作の最初の中国語訳なのである。特にレーニンについての評伝が3点(1—97・110・116)あることはロシア十月社会主義革命を成功に導いた指導者として大きくクローズ・アップされたもので、当然のことであろう。わが日本においても大正12年ころよりレーニン著作の翻訳がはじまっている^⑯。スターリン著作の日本語訳は『レーニン主義とは何ぞや(『レーニン主義の基礎』の一部)]や『レーニン主義の根本問題(『レーニン主義の諸問題』)]、ともに高山洋吉訳、『レーニン主義と民族問題』松山篤一訳がそれぞれ昭和2年(1927年)に出版されているが、これらはすでに大正14年頃から秘密出版により紹介されていた^⑰。先に述べたごとくレーニン・スターリンの著作の中国語訳されたものはいずれも民族問題に関するものであるが、日本においても、特にスターリンは最初、民族問題の専門家として紹介されており、日本・中国の受容の仕方に共通点があることが指摘できる^⑱。このようなレーニン・スターリン著作の積極的な中国語訳に現れたように『新青年』の後期における翻訳方針の傾向は前期の西洋近代主義に対して、マルクス主義、社会主義的傾向がそれにとってかわったのである。この点を更に詳細に述べてみよう。

4. 後期の翻訳傾向を表徴するものはすでに述べた如く、レーニン・スターリン著作の中国語訳であるが、これと平行して当時ニューヨークで出版されていた進歩的雑誌『Soviet Russia』掲載論文の中国語訳と1919年3月にモスクワで共産主義インターナショナル(コミンテルン)

が結成され、そのコミンテルン関係文献の中国語訳が積極的に行なわれている。前者には53件（但し『Soviet Russia』に掲載論文以外に、ソ連の政治・経済に関する文献を含む）すなわち 1—14・15・20・21・24～56・73・74・76・81・101～104 がそれであり、後者には12件、I—83～90・113～116 がある。この他にマルクス主義に関する論文には I—75・82・98・99・100・112 の6件があり、太平洋会議に関するコミンテルンの見解に関する評論として I—77～79 の3件、ゴルキーの演説（I—23）1件、その他（I—80）1件がある。それらはいずれも後期の翻訳方針に包括されるものである。それ以外に前期から後期への過渡期的傾向を反映するものとして、I—58～70 の13件の翻訳がある。それはバートランド・ラッセルに関するものであり、うち8件は彼の論文の翻訳であり、5件は彼に関する評論であるが、その評論も3件は『Soviet Russia』に掲載されたものであり、他の2件を含めていずれも彼と社会主義あるいはソ連とのかわり合いに於いて論じられたものであり、それ故にこの13件のラッセル関係の翻訳は前期の西洋近代主義と後期の社会主義という2大潮流の合流されたものであり、『新青年』に翻訳掲載されたのはいずれも第8巻第2号から同第6号までである^⑧。この点からも『新青年』における翻訳史の時期区分の境界として第8巻を境界線とすることの妥当性が大方に充分に納得がいくものであることの証左となる。このように第8巻には西洋近代主義と社会主義との接点としてのラッセル関係文献の翻訳、という中間的あるいは中立的傾向に対して、先に指摘した如く、第1号における社会主義的婦人論（I—19^⑨）の掲載、同号より『俄羅斯研究』^⑩ コーナーの設置、さらに決定的に後期の翻訳傾向を確定した第3号におけるレーニン著作の最初の中国語訳の掲載により、第8巻は『新青年』における翻訳論文、評論内容の転換期の舞台となったのである^⑪。

II. 歴 史

『新青年』の初期には西洋文明の紹介に力を注ぎ、歴史のジャンルにおいては、II—1 「現代文明史」（フランス、Ch. Seignobos）陳独秀訳（I—1・II—2）が翻訳紹介されたが、このジャンルに入るものは『新青年』には後にも先にもこの1件だけであり、中国人による著作も

「青島茹痛記」淮陰釣叟（II—3・4・5）「人類文化之起源」陶履恭（II—5・6・III—1）の2件があるだけであり、第4巻以降は時事問題あるいは社会問題あるいは先の「政治・思想」のジャンルに吸収されて、純粋に歴史学としての翻訳論文はなくなった。

III. 文 学

『新青年』を本舞台として展開された「文学革命」は陳独秀・胡適等によっていくつかの論

文が発表されたが、外国における文学理論の翻訳紹介されたものには

Ⅲ-1 「陀思妥夫斯奇之小説」(米国, W. B. Trites) 周作人訳 (IV-1)

Ⅲ-2 「近代戯劇論」(米国, G. Goldman) 震瀛訳 (VI-2)

Ⅲ-3 「文芸之進化」(日本, 厨川白村) 朱希祖訳 (VI-6)

Ⅲ-4 「与支那未知的友人」(日本, 武者小路実篤) 訳者名なし (VII-3)

Ⅲ-5 「文学与現代的俄羅斯」(ソ連・Gorky) 鄭振鐸訳 (VIII-2)

Ⅲ-6 「蘇維埃政府底保存芸術」(ソ連・Lunacharsky) 震瀛訳 (VIII-5)

の5件があるだけで、他に中国人自身による文学評論が沈雁冰・周作人・朱希祖らによって発表されているが10数篇にとどまっており、「季刊」以後になると季刊第1期の「国際歌」「赤潮曲」(瞿秋白訳)と同第2期の「狗熊(戯曲・ロシア・Chekhov 作)」(曹靖華訳)「荒漠里(文学評論)」陶畏巨が掲載されただけで、文学文芸理論の論文は勿論のこと、小説・戯曲・詩歌の作品の翻訳も後をたってしまった。上記の翻訳された文学文芸理論も最後の二篇は社会主義との関係において論じられており、ここにも『新青年』の編集方針の変遷ぶりが反映されている。

IV. 小 説

外国の文学作品のうち小説の翻訳は白話体の確立、つまり「文学革命」における形式面での発展がまだ充分に見られない時期は毎号に1篇あるかなしかの状態であったのが、第4巻第5号(1918年5月)に魯迅の最初の白話小説「狂人日記」が発表されてからしばらくして、第5・6・7・8巻には集中的に翻訳され、第1巻より第9巻までの間に合計37篇が翻訳されており、そのうち三分之二の24篇が周作人によって翻訳されており、これについて陳焜が3篇、胡適3篇、魯迅2篇、汪中明、劉半農、張黃、沈雁冰、沈沢民がそれぞれ一篇ずつ翻訳している。作家の国籍ではロシアの作家のものが一番多く14篇(うちツルゲーネフ長篇2篇、クプリン3篇、ソログープ2篇、トルストイ、チェーホフ、アンドレーエフ、ダンチェンコ、コロレンコ、アルツイパーシェフ、テレシヨフ各1篇)で、ついでフランス人作家のもの6篇(うちモーパッサン4篇、ゴンクール兄弟・ルメートル各1篇)、ポーランド人作家のもの5篇(ジェーンケヴィッチ、ツェルムスキー各2篇、プルス1篇)、日本人作家のもの4篇(江馬修、千家元磨、国木田独歩、菊地寛各1篇)、スウェーデン人作家のもの2篇(2篇ともストリンドベルグ)、他の国のものは1篇ずつとなっている。すなわち英国(マッドック)、ギリシャ(エファタリオティス)、デンマーク(アンデルセン)、南アフリカ(ジュライナー)、アルメニア(アガロニアン)、スペイン(イバネス)各1篇である。リストを挙げれば次の如くである。

- IV-1 「春潮」(ロシア, Turgenev) 陳緞訳 (I-1~6・II-1)
- IV-2 「初恋」(ロシア, Turgenev) 陳緞訳 (I-5・6・II-1・2)
- IV-3 「決闘」(ロシア, Teleshov) 胡適訳 (II-1)
- IV-4 「寺鐘」(フランス, Lemaitre) 汪中明訳 (II-4)
- IV-5 「磁狗」(英国, Muddock) 劉半農訳 (II-5)
- IV-6 「基弥米里」(フランス, Goncourt 兄弟) 陳緞訳 (II-6・III-5)
- IV-7 「二漁夫」(フランス, Maupassant) 胡適訳 (III-1)
- IV-8 「梅呂哀」(フランス, Maupassant) 胡適訳 (III-2)
- IV-9 「童子 Lin 之奇迹」(ロシア, Sologub) 周作人訳 (IV-3)
- IV-10 「皇帝之公園」(ロシア, Kuprin) 周作人訳 (IV-4)
- IV-11 「不自然淘汰」(スウェーデン, Strindberg) 周作人訳 (V-2)
- IV-12 「改革」(スウェーデン, Strindberg) 周作人訳 (V-2)
- IV-13 「新希腊故事」(ギリシア・Ephataliostis) 周作人訳 (V-3)
- IV-14 「酋長」(ポーランド, Sienkiewicz) 周作人訳 (V-4)
- IV-15 「空太鼓」(ロシア, Tolstoy) 周作人訳 (V-5)
- IV-16 「小小の一個人」(日本, 江馬修) 周作人訳 (V-6)
- IV-17 「売火柴の女兒」(デンマーク, Anderson) 周作人訳 (VI-1)
- IV-18 「鉄圈」(ロシア, Sologub) 周作人訳 (VI-1)
- IV-19 「可愛の人」(ロシア, Tschekhov) 周作人訳 (VI-2)
- IV-20 「白璞田太太」(フランス, Maupassant) 張黃訳 (VI-3)
- IV-21 「沙漠間の三個夢」(南アフリカ, O. Schreiner) 周作人訳 (VI-6)
- IV-22 「齒痛」(ロシア, Andrejev) 周作人訳 (VII-1)
- IV-23 「摩訶末の家族」(ロシア, Dantschenko) 周作人訳 (VII-2)
- IV-24 「誘惑」(ポーランド, Zeromsky) 周作人訳 (VII-3)
- IV-25 「黄昏」(ポーランド, Zeromsky) 周作人訳 (VII-3)
- IV-26 「晩間の来客」(ロシア, Kuprin) 周作人訳 (VII-1)
- IV-27 「瑪加爾の夢」(ロシア, Korolenko) 周作人訳 (VIII-2)
- IV-28 「幸福」(ロシア, Artsybashev) 魯迅訳 (VIII-4)
- IV-29 「深夜の喇叭」(日本, 千家元磨) 周作人訳 (VIII-4)
- IV-30 「少年的悲哀」(日本, 国木田独歩) 周作人訳 (VIII-4)

- IV-31 「願你有福了」(ポーランド, Sienkiewicz)周作人訳 (VIII-6)
 IV-32 「世界的讎」(ポーランド, Prus) 周作人訳 (VIII-6)
 IV-33 「一滴の牛乳」(アルメニア, Agaronjan) 周作人訳 (VIII-6)
 IV-34 「西門の爸爸」(フランス, Maupassant) 雁冰訳 (IX-1)
 IV-35 「快樂」(ロシア, Kuprin) 沈民沢訳 (IX-1)
 IV-36 「三浦右衛門的最後」(日本, 菊地寛) 魯迅訳 (IX-3)
 IV-37 「顛狗病」(スペイン, Ibanez) 周作人訳 (IX-5)

なおこれらの作品の中国語訳はそのほとんど全部が短篇集として単行本に収録されている。(「漢訳東西洋文学作品編目——1929年3月止——」蒲梢編『中国現代出版史料, 甲編』張静廬輯註271~323頁所収参照)

V. 戯 曲

新しい文芸作品としての所謂「新劇」の台本が『新青年』の第1巻第2号より早くも連載されていることは注目すべきことである。『新青年』に訳載された戯曲は全部で13作品であるが、連載延数にすると32回にのぼる。最初の2作品はいずれも英国の Oscar Wilde のもので、他に彼の作品がもう1篇、合計3篇、英国作家のものはこの他に2篇 (P. Wilde, Merrill) があり、英国近代劇が5篇紹介されている。これと双壁をなすものが、第4巻第6号で特集号が出された Henrik Ibsen の作品で3篇翻訳されている。このなかには勿論彼の代表作である「人形の家」が含まれているが、その特集号の冒頭には胡適の「易卜生主義」が掲載されており、近代個人主義や自我の確立が初期の『新青年』の編集方針に合致したことによるのはいうまでもないことである。すなわち「科学と民主」のうちの「民主」を支える個人の自我の確立、特に若い世代の男女へのよびかけが、先の「政治・思想」の項での青年論・女性論としてではなく、新しい近代劇という表現形式でもってなすことができたからである。このほかに Ibsen と同じノルウェーの劇作家 Byornson の作品が1篇訳されている。他はすべて各劇作家の作品が1篇づつ翻訳されていて。すなわち、日本(武者小路実篤)、ユダヤ人 (David Pinski)、アイルランド (Lady Gregory)、ロシア (Chekhov) である。なおわが国におけるイブセンの受容について見るに、明治26年(1893年)にすでに高安月郊によって「社会の敵」が部分訳されており、1901年には「人形の家」とともに『イブセン作・社会劇』として刊行され、1902年に花房柳外が洋式新劇として「社会の敵」を翻案して上演している。さらに1909年には森鷗外訳による「ジョン・ガブリエル・ボルグマン」が自由劇場(2世市川左団次主演)によって上演され、1911年には島村抱月訳「人形の家」が文芸協会研究会第1回試演会として本邦初演された(ノ

ラ役・松井須磨子)。翌年1912年にも千葉掬香訳「ヘッダ・ガアブレル」が近代劇協会(伊庭孝・上山草人ら主宰)によって上演されている。『新青年』に訳載されたチャーホフの戯曲「狗熊」はわが国ではすでに明治43年(1910年)に小山内薫訳「犬」として自由劇場によって上演された(岩波書店『近代日本総合年表』による)。翻訳された戯曲は次のとおりである。

- V-1 「意中人」(英国, Oscar Wilde) 薛琪瑛訳 (I-2・3・4・6・II-2)
- V-2 「弗羅連斯」(英国, Oscar Wilde) 陳瑕訳 (II-1・3)
- V-3 「琴魂」(英国, Margaret Merrill) 劉半農訳 (III-4)
- V-4 「天明」(英国, P. L. Wilde) 劉半農訳 (IV-2)
- V-5 「娜拉(人形の家)」(ノルウェイ, Henrik Ibsen) 1・2幕—羅家倫訳・3幕—胡適訳 (IV-6)
- V-6 「国民之敵」(ノルウェイ, Henrik Ibsen) 陶履恭訳 (IV-6・V-1~4)
- V-7 「小愛友夫」(ノルウェイ, Henrik Ibsen) 吳弱男訳 (IV-6・V-3)
- V-8 「遺扇記」(英国, Oscar Wilde) 沈性仁訳 (V-6・VI-1・3)
- V-9 「一個青年的夢」(日本, 武者小路実篤) 魯迅訳 (VII-2~5)
- V-10 「新聞記者」(ノルウェイ, Bjornson) 沈性仁訳 (VII-5・VIII-1・IX-2)
- V-11 「被幸福忘却の人們」(ユダヤ, David Pinsky) 周作人訳 (VIII-3)
- V-12 「海青赫仏」(アイルランド, Lady Gregory) 沈雁冰訳 (IX-5)
- V-13 「狗熊」(ロシア, Anton Chekhov) 曹靖華訳 (季-2)

第5巻第4号においては「戯劇改良」に関する論文評論などが6篇も掲載され、さながら特集号の如き観がある。

VI. 詩

第1巻第2号に陳独秀が文言ではあるが Tagor の「贅歌」と S. F. Smith の米国国歌「アメリカ」を訳載し、さらに第2巻第6号および第3巻第4号に胡適が自作の「白話詩八首」などを発表し、また劉半農が第3・4両巻2・4・6号に「靈霞館筆記」を連載し、そこで西洋詩翻訳を試み、特に第3巻5号で「詩与小説精神上之革新」を発表するにおよんで、小説に先行して詩の世界において伝統的な五言・七言・絶句・律詩・排律という枠から解放された「文学革命」が実現された。それは第4巻全体で延33人の白話詩が連載され、毎号平均5人の詩が発表された(第6号は「イプセン特集号」のため掲載されず)。第5巻には延26人、第6巻には延30人、第7巻には15人、第8巻には延27人、第9巻には延18人がそれぞれ伝統的な五言絶句などの平仄・押韻をふまえて白話の語彙で創作したものから、完全に自由奔放な自由詩など

の様々な形式の白話詩が掲載された。^⑤ 作者別の発表回数を見るに、胡適・劉復がともに32回と断然群を抜いており、ついで沈尹默の18回、周作人の16回、俞平伯と沈兼士が各8回、魯迅が7回、陳独秀と沈玄廬が各4回、陳衡哲と康白情が各3回、李大釗、夫庵、双明、汪静之が各2回、林損、常雲、李劍農、V2生、蘇菲、沈鈺毅、天風、任鴻雋、陳子誠、陳建雷、陳綿、劉大白、徐景元、沈雁冰が各1回となっている。季刊になってからは第1期に2首、第2期に8首それぞれ掲載されて、その後は他の文芸作品と同様に姿を消してしまうが、その詩の内容は月刊の時のそれとはまったく異なり、編集方針を体現したとも言うべき革命詩となっている。第1期の2首とは1首は革命歌曲「インターナショナル」の訳詩であり、他の1首は瞿秋白作詞の「赤潮歌」である。第2期には文虎（羅章龍）の訳になるハイネの詩と赤軍歌曲が各1首、それに工人某、瞿景白、劉捍農の各1首、それに瞿秋白（巨縁、双莫）の3首が掲載されたのである。そのなかでも特に翻訳詩を列举すると次の通りである。

- VI-1 「讚歌」(インド, Tagore) 陳独秀訳 (I-2)
- VI-2 「＜美国国歌＞亜英利加」(米国, Samuel F. Smith) 陳独秀訳 (I-2)
- VI-3 「靈霞館筆記」(ヨーロッパ各国の詩人の作品) 劉半農 (II-2・4・6, III-2・4・6)
- VI-4 「老洛伯」(スコットランド, Lady A. Lindsay) 胡適訳 (IV-4)
- VI-5 「我行雪中」(インド, Ratan Devi) 劉半農訳 (IV-5)
- VI-6 「Tagore 詩2章」(インド, Tagore) 劉半農訳 (V-2)
- VI-7 「詩詩十九首」(インド, Tagore 及び Naidu, ロシア, Turgenev) 劉半農訳 (V-3)
- VI-8 「関不住了」(米国, Sara Teasdale) 胡適訳 (VI-3)
- VI-9 「德国農歌」(ドイツ, 民謡) 蘇菲重訳 (VI-4)
- VI-10 「希望」(ペルシャ, O. Khayyam) 胡適重訳 (VI-4)
- VI-11 「奏樂的小孩」(英国, A. Dobson) 沈鈺毅・天風共訳 (VI-6)^⑥
- VI-12 「路旁」(ノルウェイ, Ibsen) 任鴻雋訳 (VII-1)
- VI-13 「雑訳詩二十三首」(Esperanto 語雑誌よりの重訳) 周作人訳 (VIII-3)
- VI-14 「雑詩日本詩三十首」(日本, 石川啄木, 千家元磨, 堀口大学, 北原白秋, 与謝野晶子, 武者小路実篤, 野口米次郎, 木下杢太郎, 生田春月, ら13人) 周作人訳 (IX-4)
- VI-15 「国際歌」(フランス, Porthier) 訳者名なし (季-1)
- VI-16 「革命」(ドイツ, Heine) 文虎訳 (季-2)
- VI-17 「進行曲」(ソ連, 赤軍歌曲) 文虎訳 (季-2)

VII. その他

まず掲載順にこの部類に入る翻訳をあげる。

- VII-1 「血与鉄」（英国，ロンドン自由旬報）汝非訳（I-4）
- VII-2 「人生科学①女性与科学，②青年与性欲，③人口問題与医学」（日本，小酒井光次）孟明訳（I-4・5・6）
- VII-3 「仏蘭克林自伝」（米国，Franklin）劉叔雅訳（I-5）
- VII-4 「欧洲花園」（ポルトガル，A. H. Silva）劉半農訳（II-3）
- VII-5 「天才与勤勉」（ドイツ，H. W. Beecher）程師葛訳（III-1）
- VII-6 「金錢之功用及罪惡」（米国，Samuel Smile）何先槿訳（III-2）
- VII-7 「中国学研究者之任務」（日本，桑原隲蔵）JHC 生訳（III-3）
- VII-8 「羅斯福国防演説」（米国，Roosevelt）李権時訳（III-4）
- VII-9 「基督教徒当為士卒否」（英国，Hilty）何源来訳（III-4）
- VII-10 「智楽篇」（米国，Sydney Smith）胡善恒訳（III-5）

以上の10篇が見られるだけであり，しかもそれらは第1巻より第3巻までに限られており，第4巻以後にはその他の部類に入る雑多な内容の著作の翻訳はなされなくなった。この事は初期の教養主義的な編集方針が次第に薄れていく過程の1コマを反映している。

要 約

以上詳細に『新青年』に翻訳された日本及び西洋の著作について内容別にかつ発行順に分類整理し，そこから『新青年』における翻訳された著作の内容の傾向について，部門別に論じた。今ここでそれらを総括すると次のようにまとめることができよう。

最初に『新青年』全体の編集方針にもとづいて，『新青年』を①新文化運動啓蒙誌（1915年9月～18年12月），②マルクス主義宣伝誌（1919年1月～20年5月），③統一戦線の中共機関誌（1920年9月～22年7月），④中共中共純理論機関誌（1923年6月～26年7月）に分けられる（ただし，③の統一戦線の時期を1921年7月1日の中国共産党成立期をもって2分し，前半を②のマルクス主義宣伝期に，後半を④の中共中央理論誌の時期に併合して，全体を3分することも認められる）ことを提示した。勿論，編集方針が直接翻訳する外国文献の取捨選択を決定し，そこから一種の翻訳傾向が生まれてくるが，翻訳傾向そのものについては必ずしも先の3乃至4区分の時期には一致しないことはすでに指摘した通りである。『新青年』に翻訳された著作の内容的傾向から，3時期に区分することができる。第1期はまず第1巻第1号よりレーニンの著作が翻訳され，バートランド・ラッセルの一連の著作と評論類が翻訳され，さらに

「俄羅斯研究」の特設欄が設けられ、『Soviet Russia』所収論文が陸続と訳載された第8巻第1号までがそれである。特に上海の新青年社より発行された第8巻第1号より同第5号までが交錯した境界線となっている。次の境界線は広州の平民書社より発行された季刊第1期および同第2期がそれである。この2冊を境にして文学作品がその後翻訳ものは勿論のこと、中国人による創作もすべてまったく掲載されなくなったのである。

つまり、翻訳傾向より区分した第1期は西洋近代主義、科学、民主に関する著作および文学作品の翻訳に力を入れた時期であり、第2期は文学作品もいくらか翻訳されているが、マルクス主義、社会主義関係の著作の翻訳が大量に訳載された時期であり、第3期は文学作品はまったく翻訳されず、中共中央純理論誌にふさわしい内容の論文のみを掲載した時期と規定することができるのである。 (未完)

註

- ① 李龍牧「五四時期傳播馬克思主義的重要刊物——新青年」『五四時期期刊介紹第一集』1～40頁所収、「新聞戰綫」1958年第一、二期より転載)による。
- ② 1921年7月中国共産党成立後の『新青年』は一応中国共産党理論誌と見なされるものとなったが、第9巻4号より6号までなお胡適の「国語文法的研究法」(4号)、「[詩] 平民学校校歌・希望」(6号)を掲載しており、純粹の中共理論誌とは言えず、統一戦線の性格を編集方針にも反映していたのである。この点を考慮して、藤田正典氏は大安影印本『新青年』附録「総目録」において『新青年』を次のような4時期に区分している。即ち、1、1915年9月～18年12月(1巻1号～5巻6号)30冊、新文化運動啓蒙誌。2、1919年1月～20年5月(6巻1号～7巻6号)12冊、マルクス主義宣伝誌。3、1920年9月～22年7月(8巻1号～9巻6号)12冊、統一戦線的中共機関誌。4、1923年6月～26年7月(季刊1号～不定期刊5号)9冊、中共中央の純理論機関誌、つまり、李龍牧氏のいう第2期より第3期への移行期の中間形態として中国共産党成立前後の各一年間を統一戦線形成期として1時期を挿入している。
- ③ 第6号の表紙は中国人であるが、それも近代文明を体現した人間とも言える飛行家譚根であることは興味深いことである。なお肖像画は第2巻以降は姿を消して、かわって目次がそれに変わった。
- ④ 第1巻第1号及び3号「青年論」(W. F. Markwick, W. A. Smith)、第3号「近世思想中之科学精神」(T. H. Huxley)、第4号「血与鉄」(London Freedom Review)、第5号「仏蘭克林自伝」(B. Franklin)、第6号「英国人之自由精神」(E. Burke)がそれである。一応第1巻で終了したと思われたが、第3巻第2号に「金錢之功用及罪惡」(S. Smiles)が一回掲載される。
- ⑤ 「書報紹介」の欄は第3巻および第4巻にのみ設けられたものである。外国書の書評については次のようなものが見られる。たとえば第3巻第2号『Sociology and Modern Social Problem』(by C. A. Ellwood)、同第4号『The Governments of Europe』(by C. E. Ogg)、同第5号『Main Currents in Nineteenth Century Literature』(by G. Brandes)、第4巻第1号には『Millard's Review of the Far East』、『The North China Herald』、『Manchuria Daily News』の三新聞についての書評が載せられたのが最後となっている。
- ⑥ 胡適はこのような傾向に対して「『新青年』はいまやほとんど『Soviet Russia』の中国語訳本になってしまった」と反対し、出版企画と編集権を北京に移しかえ、學術思想にウエイトを置いて、政治を

談じない旨を声明すべきであると主張している（『中国現代出版資料甲編』所収「関与『新青年』問題的幾封信」による）。

- ⑦ その3篇とは「労農俄国の農業制度」周佛海（Ⅷ—5）、「俄羅斯革命的過去和現在」李守常（Ⅷ—3）、「労農俄国底電氣化」鄧生（Ⅷ—3）である。
- ⑧ うち1篇は「俄羅斯研究」欄の1—56「労農俄国底婦女解放（山川菊楽）」李達訳（Ⅷ—3）として先に挙げたので、ここでは再び登録しない。
- ⑨ わが国における婦人運動の先駆者である「青踏社」との比較検討することが必要であろう。
- ⑩ わが国で明治末より大正年間に出現した所謂「トルストイアン」の一斑を紹介しようとするものである。
- ⑪ 彼が中国を訪問したことによって、特に特集号こそ発行されなかったが、当時としては新しい思潮「プラグマティズム」を紹介することに力を入れた。このような事態は後年訪中したラッセルの場合にも見られる。ただし、ラッセルの時には特集号に近い程の編集ぶりが見られる。
- ⑫ （1—19）のベベルの婦人論を加えると16件になるが、内容的に見ても、発表の時期を考慮すれば、前期より後期への過渡的な傾向を如実に反映しているので、前期の傾向（質と量における）をきわだたせるために特に加えなかった。
- ⑬ 社会主義・マルクス主義に関する評論、論文については次のものが挙げられる（但し「前期」期間第7巻第6号までに発表されたものに限定する）。
1「Bolshevism 的勝利」李大劉（Ⅴ—5）／2「我的馬克思主義観（上）（下）」李大劉（Ⅴ—5・6）／3「馬克思学説」顧照熊（Ⅵ—5）／4「馬克思研究 ①馬克思的唯物史観与貞操問題——陳啓修，②馬克思的唯物史観——淵泉，③馬克思奮闘の生涯——淵泉」（Ⅵ—5）／5「馬克思伝略」劉乘麟（Ⅵ—5）／等がある。特に（Ⅵ—5）はマルクス主義特集号である。
- ⑭ 張静廬輯注『中国出版史料補編』1957年5月・人民出版社，442頁～451頁「馬克思，恩格斯著作中訳本年表（修訂稿）1906—1949年」による。レーニン・スターリン著作の中国語訳についても、同書の452～466頁の「列寧著作中訳本年表（修訂稿）1920—1949年」，同466～475頁の「斯大林著作中訳本年表（初稿）1924—1949年」によった。なお編者は三編とも張静廬である。
- ⑮ 大原社会問題研究所編『日本社会主義文献第一輯——世界大戦（大正三年）に到る——』1929年，同人社書店によれば，堺利彦（第1号～第23号）西川光次郎（第24号～第64号）編輯兼発行人，幸徳伝次郎印刷人になる「平民新聞」第53号（1904年11月13日発行）に堺・幸徳両氏による「共産党宣言」の全訳が掲載・発禁されたことが見られる（151頁および155～160頁）また後に1908年頃にアメリカ・サンフランシスコ・ゲリラ街革命社にて，単行本として出版された（82頁）とあり。更に『社会主義研究（月刊）』堺利彦編輯の第1号（1906年3月15日発行）に全訳掲載されている。この同じ年にわが国の東京で発行されている中国光復会の機関誌である『民報』月刊第二期に「共産党宣言」の抄訳がなされている。この点については日本語訳との関係について詳細に比較検討することにしてはいる。
- ⑯ 細川嘉六監修，渡部義通・塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説——明治維新から太平洋戦争まで——』1958年2月，大月書店刊，192頁に『ロシア革命の五ヶ年』，『レーニン論文集』が茂森唯士によって大正12年に出版されたことが紹介されている。前者の中国語訳は同年1923年に『俄羅斯革命之五年』として『新青年』季刊第一期「共産国際号」に訳載されているが訳者名は附していない。なお大正14年（1925年）11月には白楊社より『レーニン著作集』（六巻）が発刊されている。（同書332頁参照）。
- ⑰ 同上書，193～194頁参照，なお同じく白楊社より『スターリン・ブハーリン著作集』（十三巻）が昭和3年4月に発刊され，同5年2月までに出版完了している。（同書333頁参照）。

- ⑮ これは1922年1月にモスクウに於いて極東民族会議が開催されたことの反映と考えられる。
- ⑯ この点をさらに詳細に記せばラッセル著作の翻訳は第2号に5件、第3号に3件であり、彼に対する評論の翻訳は第3号で1件、第4号で2件、第5号および第6号にそれぞれ1件となっている。なおレーニンの「民族自決」はラッセルの著作「民主与革命（Ⅷ—2・3に連載）」の附録とし紹介されたことを附言しておく。わが国では松本悟朗が1919年にラッセルの『社会改造の原理』を邦訳している。
- ⑰ ベーベルの『婦人論』のわが国での翻訳は1921年に牧山正彦により、さらに山川菊栄によって1923年になされている。
- ⑱ わが国でもソ連研究あるいは紹介する目的で山川均・山川菊栄が1921年9月に『労農ロシアの研究』を出版し、翌22年10月にも山川均・堺利彦らによって『革命ロシア研究十講』などが出版され、ソ連研究あるいは紹介が盛んに行なわれた。
- ⑳ 第8巻を境として区分された後半は、さらに季刊第1・2期を境として分割され、中共中央純理論雑誌としての性格を強めるのであるがこの時期以後の中国語訳された社会主義文献はまた同時にわが国においても1924年5月に西雅雄らによって創刊された雑誌『マルクス主義』にその多くが翻訳されており、社会主義文献の専門用語の比較対照のため好個の資料である。
- ㉑ ツルーゲネの作品（Ⅳ—1・2）の翻訳は典型的な古典中国語である。これとは対象的に同じ第1巻に掲載された戯曲の翻訳（Ⅴ—1）は完全な口語文である。ここに小説と戯曲における文体確立のための難易度が如実に反映されていて趣味深いものがある。
- ㉒ ワイルドの肖像が『新青年』第1巻第3号の表紙に掲げられていることによっても、いかにワイルド戯曲の紹介に力を入れていたかがうかがえる。
- ㉓ 詩は戯曲について白話で創作されたことになり、またより広範に「文学革命」の成果を具現することとなったことが数量的に実証される。
- ㉔ Dobson の同一の詩に沈鈺毅と天風が各々別個に翻訳したものを対比している。